

アングロ・サクソン年代記研究 (3)

—その記録の形式と内容について—

大 沢 一 雄

I

アングロ・サクソン年代記は、西暦紀元⁽¹⁾1年から1154年までの重要な事件や事象を、年代順⁽²⁾に記録しているが、その記録の形式は、必ずしも、各年代を通して一様であるというわけではない。それは、主として、散文で記録されているが、中には、詩の形式をとるものもある。また、散文の記録にも、特に初期のものに多く見られるように、叙述が極めて簡単で、事件の記録というよりも、記憶保持のための簡単なメモ⁽³⁾といえるようなものから、かなりの長さにわたる、short story⁽⁴⁾とか、伝記⁽⁵⁾とさえいわれるようなものにいたるまで、いろいろな形式の記録がある。

その内容も、紀元の初めから12世紀までのものであるから、当然に多岐にわたる。それは、軍事、政治、宗教その他もろもろの事件や事象にわたるのであるが、大まかに分ければ、およそつぎの三つの項目に含まれることになるであろう。

(1) 軍事ないし戦いに関する記録。これは、異民族や異種族との間の戦いだけでなく、同種族内の争いも含み、この年代記の大部分を占める。

(2) 宗教すなわちキリスト教に関する記録。特に、聖職者の任命、宗教的儀式等の記録で、(1)ほどではないが、この年代記のかなりの部分を占める。

(3) 自然現象に関する記録。主として、日食、月食等の自然現象の記録であるが、その叙述は極めて簡単で、そのような現象が見られたことを記録するにとどまる⁽⁶⁾。

そこで、つぎに、このような記録の形式や内容について、いくつかの例を見ていくことにしよう。

Anno 1. Octauianus ricsode lvi wintra and on þam xlii geare his rices Crist wæs acenned.⁽⁷⁾

(紀元元年 オクタビアンは56年間統治し、その治世42年にキリストが生まれた。)

2. Ða tungel witgan of east dæle cuomon to þon pæt hie Crist weorþe-
don, and þa cild on Bethlem ofslægene wærun for Cristes ehtnesse from
Herode.

(2年。予言者が東方からキリストを礼拝するために来た。ヘロドのキリストに対する迫害のために、ベスレヘムの子供たちが殺された。)

3. Her swealt Herodus from him selfum ofsticod, and Archilaus his
sunu feng to rice.

(3年。この年に、ヘロドがみずからを刺して死んだ。そして、息子のアルキラウスが王国を継いだ。)

16. Her feng Tiberius to rice. (16年。この年に、ティベリウスが王国を
継いだ。)

39. Her onfeng Gaius rice. (39年。この年に、ガイウスが王国を受け継い
だ。)

46. Her Herodes aswalt, seþe Iacobum ofslog ane geare ær his agnum
deape. (46年。この年に、自身の死の1年前にヤコブ(ジェームス)を殺した
ヘロドが死んだ。)

62. Her Iacobus frater Dñi (Dryhtnes) prowode.

(62年。この年に、神の兄弟ヤコブが殉教者となった。)

63. Her Marcus se godspellere forþferde. (63年。この年に、福音書著者
マルコが死んだ。)

69. Her Petrus and Paulus prowodon. (70年。この年に、ペテロとパウロ
が殉教者となった。)

70. Her Uespasianus onfeng rich. (70年。この年に、ウエスパシアヌス
が王国を受け継いだ。)

アングル族、サクソン族、ジュート族などのゲルマン民族がイギリスに侵入する以前の記録は、概して、このように、きわめて簡単である。その内容も、キリスト教、特にその聖者に関するものが多い。いうまでもなく、ゲルマン民族がイギリスに入ってくるのは、五世紀になってからであるから、ゲルマン民族に関する記録があらわれるのは、五世紀、特に443年頃からになる。443年の記録はこうである。

443. Her sendon Brytwalas to Rome, and heom fultomes bædon wiþ Piohtas, ac hi þar næfdan nanne, forþan þe hi fyrdedon wiþ Ætla Huna cyningæ, and þa sendon hi to Anglum, and Angel cynnes æðelingas þæs ylcan bædan. (443年。この年に、ブリトン人は、ローマに使者を送り、ピクト族とたたかう軍隊を送るように求めたが、ローマ人は、フン族の王、アティラとたたかっていたので、ローマに一部隊も残していなかった。そこで、かれらは、アングル族に使者を送り、アングル族の諸侯に同じような要請をした。)

また、449年の記録はジュート族がヘンゲストとホーサに率いられてイギリスに渡来したことを示している。

449. Her Mauricius and Ualentes onfengon rice, and ricsodon vii winter. And on hiera dagum Hengest and Horsa from Wyrtegeorne geleafade Bretta kyninge gesohton Bretene on þam stape þe is genemned Ypwinesfleot, ærest Brettum to fultume, ac hie eft on hie fuhton……………

(449年、この年、マウリキウスとワレンティネスは王国を受け継ぎ、七年間統治した。そして、かれらの統治時代に、ブリトン族の王、ポーティガンから要請を受けたヘンゲストとホーサは、はじめはブリトン族を援助するために、イプネスフレオトという海岸に上陸したが、後に、かれらは、ブリトン族と戦った。……)

また、エレに率いられたサクソン族の侵寇を示すつぎのような記録もある。

477. Her cuom Ælle on Bretenlond, and his iii suna, Cymen, Wlencing, and Cissa, mid iii scipum, on þa stowe þe is nemned Cymenesora, and þær ofslogon monige Wealas, and sume on fleame bedrifon on þone wudu þe is genemned Andredesleage. (477年。この年に、エレと三人の息子、キメン、ウレンキング、チサが三隻の船とともに、キメネゾラというところに来て、多くのウェールズ人を殺し、幾人かをアンドレデスレアグという森に逃亡させた。)

495. Her cuomon twegen aldormen on Bretene, Cerdic and Cynric his sunu, mid v scipum, in þone stede þe is gecueden Cerdicesora, and þy ilcan dæge gefuhtun wiþ Walum. (495年、この年に、二人の王侯、ケルディ

クとその息子キンリクがイギリスのケルディケゾラというところに来て、来たその日にウェールズ人と戦った。))

508. Her Cerdic and Cynric ofslogon æenne Brettisc cyning, þam was nama Natanleod, and v þusendu wera mid him, æfter was þæt lond nemned Natanleaga op Cerdicesford. (508年, この年に, ケルディクとキンリクが, ナタンレオドという名のブリトン人の王を殺した。また王とともに5千人の人々を殺した。その地方は, その後, ケルディケスフォールドまでナタンレアグと名づけられた。)

514. Her cuomon West Seaxe in Bretene, mid iii scipum, in þa stowe þe is gecueden Cerdicesora, Stuf and Wihtgar, and fuhtun wiþ Brettas and hie gefliemdon. (514年, この年に, ストフとウィフトガルというウェスト・サクソン人が3隻の船を率いて, イギリスのケルディケゾラというところに来て, ブリトン人と戦い, 敗走させた。)

519. Her Cerdic and Cynric West Sexena rice onfengun, and þy ilcan gear e hie fuhton wiþ Brettas þær mon nu nemneþ Cerdicesford, and siþþan ricsadan West Sexana cynebearn of þan dæge. (519年, この年に, ウェストサクソン族のケルディクとキンリクは, 王国を受け継いだ。また, 同じ年に, かれらは, 現在ケルディケスフォールドといわれているところで, ブリトン人と戦った。その日以来ずっと, ウェスト・サクソン族の王の子孫が支配した。)

530. Her Cerdic and Cynric genamon Wihte ealond, and ofslogon fea men on Wihtgaræsbyrg. (530年, この年, ケルディクとキンリクが, ワイト島をとり, ウィフトガラスブルグで数人の人を殺した。)

534. Her Cerdic forþferde, and Cynric his sunu ricsode forþ xxvi wintra, and hie saldon hiera tuæm nefum Stufe and Wihtgare Wiehte ealond.

(534年。この年に, ケルディクが死んだ。そして, 息子のキンリクが26年間続けて支配した。かれらは, 二人のおいストフとウィフトガルにワイト島をあたえた。)

538. Her sunne aþiastrode xiiii dagum ær K1. Mart from ærmergenne op undern. (538年。この年, 2月16日の早朝から午前9時まで日食が見られた。)

547. Her Ida feng to rice, ponon Norþanhymbra cynecyn onwoc.

(547年, この年, イダが王国を継承したが, このイダからノーサンブリアの王族がおこったのである。)

560. Her Ceawlin feng to rice on Wesseaxum, and Ælle feng to Norþanhymbra rice. (560年。この年、ケアウリンがウェスト・サクソンの王国を継ぎ、エレがノーサンブリアの王国を受け継いだ。)

このように、ゲルマン諸部族がイギリスに次第に定着していく模様が簡単なことばで記録されていくが、キリスト教の僧侶や布教に関する記録もところどころに織り込まれている。二、三の例をあげよう。

565. Her Columba presbiter com of Scottum on Bryttas, Peohtas to lærenne, and on Hii þam ealande mynster worhte. (565年。この年に、司祭のコロンバがピクト人を教導するために、アイルランドからイギリスに来て、アイオナ島に僧院を建てた。)

595. Her Gregorius papa sende to Brytene Augustinum mid wel manegum munecum, þe Godes word Engla peoda godspelledon. (595年、この年に、ローマ教皇グレゴリーは、非常に多くの修道士とともに、オーガスティンをイギリスに派遣し、修道士たちは、イギリス人に福音を伝えた。)

601. Her sende Gregorius papa Agustino ærce biscepe pallium in Bretene, and wel monige godcunde lareowas him to fultome, and Paulinus biscop gehwerfde Edwine Norþhymbra cyning to fulwihte. (601年。この年に、ローマ教皇グレゴリーは、イギリスの大司教オーガスティンに、祭服パリウムと、かれを補佐する非常に多くの説教師たちを送った。また、ポーリナス司祭は、ノーサンブリアの王エドウィンをキリスト教に改宗させた。)

604. Her East Seaxe onfengon geleafan and fulwihtes bæp under Sæbrihte cinge and Mellite bisceope. (604年。この年に、イースト・サクソン人たちが、サベルフト王とメリタス司祭の手により、信仰を受け入れ、洗礼を受けた。)

さて、戦闘や宗教について、特に稿本の \bar{A} においては、このように簡単な記録が、その後も続けられていくのであるが、700年代に入ると、やや詳細な記録があらわれてくる。特に、755年の記録は最初の English short story⁽⁸⁾ といわれるように、2頁近いかなり詳細な記録で、その内容もよくまとまっている。次に訳文だけを掲げることしよう⁽⁹⁾。

755年。この年に、キネウルフとウェセックスの顧問官たちは、シゲブリフト

から、不法な行動を理由に、ハンプシャーを除いて、その王国を奪った。シゲブリフトは、誰よりも長く彼に仕えてきた太守(クンブラ)を殺すまでそのハンプシャー地方を保持していたが、キネウルフは、彼が太守を殺した時、彼をウィールド地方へ追放した。シゲブリフトは、プリベットの小川のほとりで、牧夫に刺し殺され、それによって太守クンブラのかたきをとられるまで、その地方に住んでいた。また、キネウルフは、ウェールズ人に対して、しばしば、大きな戦いをした。そして、およそ31年間統治した後、キネヘアルドという貴族を放逐しようとした。そのキネヘアルドは、あのシゲブリフトの兄弟だったのである。その後、キネヘアルドは、王が少数の随員をともなって、メランタンの或る女性を訪問しようとしていることを知った。そこで、彼は、王を奇襲し、王といっしょにいたものたちが彼に気づかないうちに、その休憩所をとりかこんだ。その時王は、かこまれたことに気がつき、ドアの方へ行って、勇敢に防禦し、それからその貴族を見つけて、おそいかかり、重傷を負わせた。すると、貴族の家来たちはみな王におそいかかかっていき、ついに王を殺してしまった。その時、女の叫び声から、王の家臣たちはそのさわぎに気がついた。そこで、すばやくすぐ行けるものはみな、その王が殺された場所まで走って行った。貴族は、彼らの一人一人に金品をあたえ、命を助けてやると申し出たが、誰も受け入れようとしないで、重傷を負っていた一人のウェールズ人の人質を除いて全部殺されるまで戦いを続けた。朝になって、後方に残されていた王の近侍の武士たちが、王が殺されたことを聞いた時、彼らは、そこに馬を走らせていった。王の太守オスリク、近侍の武士ウィベルス、それに王が後方に残して来ていた家臣たちも来て、王が殺されて横たわっている、とりでで固めてある場所にその貴族を見出した。貴族らは、門を閉していたが、王の家臣たちが、門のところまで行くと、彼は、彼らが、自分に王国をあたえてくれるなら、彼ら自身に金や土地を選ばせるという申入れをおこない、お前たちの同族のものでも余を見捨てようとしないものが余のもとにいるのだといった。すると、王の家臣たちは、どんな同族のものも、我らにとって、主君より大切ではないと答え、主君を殺したものにけっして、従がおうとしなかった。それから、彼らの同族のものを無事に去らせるようにと申し入れた。すると、貴族らは、同じことを王といっしょにいたお前たちの仲間のものたちにも提案したのであるが、王といっしょに殺されたお前たちの仲間と同じように、殺すようなことをしたくないのだと答えた。しかし、王の家臣たちは門のまわりで戦いを続け、ついに中に押し入り、貴族と、貴族といっしょにいた家来たちを殺した。太守

の名づけ子を除いた全員を殺したのである。……

この755年の記録は、このように、一つのまとまった story となっている。そして、そこには、権勢のためのはげしい闘争と、それにともなう血なまぐさい殺戮が展開されている。一つの story として、これほどまとまったものでなくても、このような戦いと殺戮の記録、とくに Danes との戦いの記録は⁽¹⁰⁾、この年代記の大きな部分を占めるのである。

II

アングロ・サクソン年代記は、すでに述べたように、Old English そのものの発達の過程をあとづけることができる⁽¹¹⁾こともさることながら、このように、「初期の英語の散文の style の間断のない発達をあとづける」⁽¹²⁾こともできるのである。しかしながら、そこにはまた、詩の形式をとる記録もかなり見られる。編纂者は、時に、興至り感極まる時、冷静な散文ではなく、韻文で表現する。937年の有名な the Battle of Brunanburh を始めとするいくつかの記録は、そのような韻文による記録である。

ところで、アングロ・サクソン詩は、周知のように、end-rime がなく、行中の重要な語のアクセントのある音節が同音で始まる。すなわち、(1) 一行は二つの半行 half-line に分かれ、その間に休止 pause すなわち caesura があり、(2) 一つの half-line に二つずつの metrical feet (arsis という) すなわち強勢があり、(3) 各行に二つか三つの頭韻 (alliteration) がある。すなわち、2nd half-line の 1st arsis には必ずあり、1st half-line には、1st arsis にある場合と 2nd arsis にある場合と、その両方にある場合というように三通りある。(4) 頭韻は子音 (子音群) の場合は同音、母音は異なる母音と韻を踏むことができる、(5) いわゆる代称 (kennings) すなわち同じものをいろいろなことばであらわすことが多い、というような規則ないし特徴をもつ。そして、アングロ・サクソン年代記に見られる詩はほとんどすべて、このような規則による形式をととのえており、また kennings も多い。つぎに、いくつかの例をあげてみよう。

937. Her Æpelstan cyning, eorla dryhten,
beorna beahgifa, and his bropor eac
Eadmund æpeling, ealdorlangne tir
geslogon æt sæcce, sweorda ecgum,

ymbe Brunanburh, bordweal clufan,
heowan heaporlinde, hamora lafan,
afaran Eadweardes, swa him geæpele wæs
 from cneomægum, pæt hi æt campe oft
 wip lapra gehwæne, land ealgodon,
hord and hamas. [hettend crungun] (以下略)

この年、戦士の主君でよろいの腕甲授与者
 アセルスタン王、弟のエドモンド公と共に、
 剣のやいばによりブルーナブルフの戦いで、
 消えることのない栄光に輝く。

このエドワード王の息子たちは、
 槌で打たれて作られた刀で、
 盾の壁をたたき割り、

しなの木で作られた丸盾をたたきくたく。
 祖先の血を受け継いでいるように、
 憎むべき敵とのしばしばの戦いで、
 国土と財宝と家々をまもった。

942. Her Eadmund cyning, Engla peoden,
maga mundbora, Myrce geeode,
dyre dædfroma, [swa Dorscaderp,] (以下略)

この年、エドモンド王、イギリス国民の王、
 一族の守護者、愛すべき偉業者。
 マーシャを征服する。

973. Her Eadgar wæs, Engla waldend,
corpre micelre, to cyninge gehalgod,
 on pære ealdan byrig, Acemannesceastre, (以下略)

この年、イギリスの支配者エドガー、……………
 古都アケマンネスカスターで、大会議により、
 聖別して国王に任じられる。

1065. Her Eadward kingc, Engla hlaford,
sende sopfæste sawle to Criste,
 on Godes wæra gast haligne. (以下略)

この年、イギリスの君主、エドワード王

廉潔な靈魂をキリストに送る。
その神聖な靈を神の守護の中に。

さて、上にあげたいいくつかの例に見られるように、アングロ・サクソン年代記の韻文の記録には、典型的なアングロ・サクソン詩の特徴が示されている。下線で示した alliteration, caesura, half-line 等は極めて規則的に作られているし、代称 (kennings) も多く用いられ、王その他の支配者に対する讚美のことばをつらねているのである。

その内容には、それらの代称で示されているように、支配者に対する賛辞はあっても、批判的なことばや憎悪のことばは見られない。血なまぐさい戦場の描写も、戦争によって苦しめられる民衆の怨嗟の声となって出てくることはないのである。

ところが、年代記の後期の記録、特に Norman Conquest 以後の記録には、後述のように、散文の記録もそうであるが、韻文の形をとるものにも、支配者に対するはげしい怒りや怨嗟の声が満ち満ちている。また韻文の形式も、形がくずれ、もはや OE 詩の特徴を示さない。つぎに、そのような韻文を掲げてみることにしよう。

(1086) castelas he let wyrcean,
and earne men swiþe swencean.
Se cyng wæs swa swiþe stearc,
and benam of his underpeoddan manig marc
goldes, and ma hundred punda seolfres.
Ðet he nam be wihte, and mid mycelan unrihte,
of his landleode, for littelre neode.
he wæs on gitsunge befeallan,
and grædinæsse he lufode mid ealle.
he sætte mycel deorfriþ, and he lægde laga þærwiþ,
þæt swa hwa swa sloge heort oþþe hinde
þæt hine man sceolde blendian.
he forbead þa heortas, swylce eac þa baras,
swa swiþe he lufode þa headeor,
swilce he wære heora fæder.

Eac he sætte be þam haran þæt hi mosten freo faran ;
 his rice men hit mændon, and þa earme men hit beceorodan.
 Ac he [wæs] swa stip þæt he ne rohte heora eallra niþ,
 ac hi moston mid ealle þes cynges wille folgian,
 gif hi woldon libban oppe land habban,
 land oppe eahta oppe wel his sehta.
 Wala wa, þæt ænig man sceolde modigan swa,
 hine sylf upp ahebban, and ofer ealle men tellan.
 Se ælmihtiga God cypæ his saule mild heortnisse,
 and do him his synna forgifenesse.

王は城を建てさせたが、
 それは、貧しい人々にとって、
 はなはだしい重荷であった。
 無情な人であった、王は、
 その臣民から何マルクもの金と、
 何百ポンドもの銀をうばった。
 これらの金額を、彼は、
 人民から、目方によって、うばったのだ。
 しかも、極めて不当に、
 ほとんど必要性がないのに。
 彼は、貪欲に落ち込み、
 強欲に身をまかせた。
 王は、広大なしかの禁猟地を区画して、
 それについて法律を定め、
 雄じかや雌じかを殺したものはすべて、
 めくらにすべきことを定めた。
 彼は、雄じかを殺すことを禁じた。
 いのししを殺す場合と全く同じように。
 何故なら、彼は、雄じかを、
 あたかも彼がその父であるかのように、
 強く愛したからだ。
 うさぎも、苦しめられることのないようにと、

彼は定めた。
 富める人々は不満をもらし、
 貧しい人々は悲しんだ。
 しかし、彼は、すべての人々の彼に対する憎しみを
 意に介しないほど無情であった。
 それ故、人々は、
 彼らの生命や土地を
 彼らの財産や王の寵愛を
 維持しようとするれば、
 完全に彼の意思に服することを
 余儀なくされた。
 ああ、それほど傲慢に振舞い、
 自らを高しとして、
 人の上に人を置く人があるとは。
 全能の神よ、
 願わくは、
 王の霊に、
 慈悲を垂れ給え。
 そして、王の罪を許し給え。

形式についていえば、この詩はもはや OE 詩の特徴を備えていない。もちろん、そこにはいくつかの頭韻が見られる。しかし、それは、前述のような OE 詩の形式を踏んだ頭韻ではないのである。この詩は稿本 E に出て来る詩で、しかも、稿本 E は 1121 年以後書かれたものであるから、OE 詩の特徴を失っていても不思議ではないが、その内容も、はげしい口調で、王 William 一世の罪業を並べ、神に、その罪の許しを願っているという点で、前掲の詩と大きく異なることが注目されるのである。そして、このような傾向は、この詩に止まらない。他の多くの散文の記録にも、随所に見られるのである。しかし、この点については、項を分けて述べることにしよう。

III

アングロ・サクソン年代記は、すでに見て来たように、大部分は権力者の野望達成のための戦いの記録である。古い時代の歴史に関する文書の多くがそう

であるように、それは、主として権力の側から、すなわち支配者の側から眺められた事件の記録であり、したがって、そこには、いうまでもなく、人民ないし庶民の側から事件を眺めるという態度が見られないのであるが、掠奪の記録が極めて多いことから見て、そこには戦禍による民衆の塗炭の苦しみをうかがうことができるのである。しかし、編纂者は、戦闘や殺戮や掠奪の模様を淡々と述べていくことが多く、権力者に対する批判の調子は、後の、特に Norman Conquest 以後の記録になるまでは見られない。Norman Conquest 直前の前掲の 1065 年の Edward the Confessor に関する記録と韻文による William 一世に関する記録を比較すると、両者の間の対照は、極めて鮮かである。この年代記が主として僧院で書き続けられてきたことからいって、信仰の厚い王といわれたアングロ・サクソン王朝最後の王 Edward に対する評価と、言語を異にする征服者 William の評価が異なることは当然といえるが、William に関する記録は、むしろ文学的な性格を帯びているといえるほど、その多くの側面に対して、照明が当てられている。その性格描写が、英語による伝記の初まり⁽¹³⁾といわれるゆえんである。

ところで William の性格や行動の評価は前掲の 1086 年の詩にいえば集中的に表現されているといえるのであるが、散文の記録にもそのようなことばが見られる。たとえば、1085年の記録は、つぎのように述べているのである。

And men heafdon mycel geswinc pæs geares, and se cyng lett awestan pæt land abutan þa sæ, þet gif his feond comen upp, pæt hi næfdon na on hwam hi fengon swa rædlice. (MS. E 1085)

(また、人々は、その年に、ひどい圧制に苦しんだ。王が王の敵が上陸しても、すぐ襲撃できるものは何もないように、海岸地方を荒廢のままにしておくように命じたからである。)

また、1086年の記録はつぎのように述べている。

Se cyng and þa heafodmen lufedon swiþe and oferswiþe gitsunge on golde and on seolfre, and ne rohtan hu synlice hit wære begytan buton hit come to heom. Se cyng sealde his land swa deore to male, swa heo deorost mihte. Ðonne com sum oþer and bead mare þonne þe oþer ær sealde, and se cyng hit lett þam menn þe him mare bead. Ðonne com se þridde and

bead geat mare, and se cyng hit let þam men to handa þe him eallra meast bead, and ne rohte na hu swiþe synlice þa gerefan hit begeatan of earme mannon, ne hu manige unlaga hi dydon. Ac swa man swyþor spæc embe rihte laga, swa mann dyde mare unlaga..... (MS. E 1086)

(王や首長たちは、余りにも金銀への貪欲を愛した。そして、かれらの手もとに来る限り、それがどのように罪深い方法で得られたか意に介しなかった。王は、彼の土地を苛酷な条件で、できるだけ高い値段で譲渡した。もし、別のものが来て、前の買手より多く提供するならば、王は、自分により多く提供するものに、それをあたえた。もしも、第三の人が来て、なお多く提供するならば、王は、自分に最も多く提供するものに、それを譲渡したのである。彼は、代官が貧しい人々からどんな不当なしかたでそれを手に入れようと、また、彼らがどんなに多くの違法な行為をしようと、全然意に介しなかった。そして、正義の法律の声が大きければ大きいほど、多くの不正が犯されたのである。)

Reowlic ping he dyde, and reowlicor him gelamp. Hu reowlicor? him geyfelade, and þæt him stranglice eglade. (MS. E 1086)

(彼(王)は悲しむべきことをしたが、もっと悲しむべきことが身に振りかかって来たのである。何と悲しむべきことだろう。彼は病気になって、ひどく苦しんだのである。)

Eala hu leas and hu unwrest is pysses middaneardes wela. Se þe wæs ærur rice cyng, and maniges landes hlaford, he næfde þa ealles landes buton seofon fot mæl, and se þe wæs hwilon gescrið mid golde and mid gimum, he læg þa oferwrogen mid moldan. (MS. E 1086)

(ああ、この世の富は何と空しく何と移ろいやすいものだろう。かつては強大な力をもつ王であった人が、多くの国の君主であった人が、その中のわずか7フィートの土地しか残されていないのだ。かつては黄金と宝石に飾られていた人が土で全身を覆われてそこに横たわっているのだ。)

年代記編纂者の William の治世に対する評価は極めてきびしい。権勢や富に対する飽くことのない欲望、そして、それを達成するために手段を選ばず、民衆の水火の苦しみを顧慮することを知らない、といった不法な行為の結果として、彼自身病気というそれ以上に苛酷な運命に苦しみながら死んでいく。しかも、権勢や富におごった彼に残されたものは、わずか7フィートの土地に過ぎない、と述べるあたり、わが国の古典に見られるような無常観さえ示されてい

るのである。

このような王や王の治世に対する極めて客観的な手きびしい見方は、彼の死後の記録にも残されている。特に過重な課税を指摘することばが所々に見られるのである。以下、それらのことばを拾ってみよう。

- 1090年 on unlagagelde (不法な課税によって).
 1102年 purh mænifealde gyld (各種の租税によって).
 1104年 purh mistlice and mænigfealdlice unriht and gyld (さまざまな種々の不正行為と租税によって).
 1105年 purh þa mænigfealde gyld þe……
 1116年 purh þa gyld þe…… (……課税によって)
 1117年 purh manigfealde gyld.
 1118年 purh þa mænigfealdlice gyld þe…… (……種々の租税によって)
 1137年 mid castelweorces (築城のための強制労働で).

不法な課税を糾弾するこのような態度は、けっきょく、王の権力の不当な行使に対する非難の一部をなすものであり、王権を絶対視する態度とはかなり異質のものであるといわなければならない。そして、そのことは、キリスト教の布教と無関係ではないであろう。何故なら、前に一言したように、聖別により王に任命するということ自体すでに、王に超越するものの存在を前提とするものだからである。そして、年代記が、僧院で、僧侶によって書き続けられてきたということが、年代記の王権に対するこのような態度を説明しているように思われるのである。また、それは、王さえも法によって拘束されるというゲルマン法の法治主義に由来することも否定することができないであろう。そして、そのような考え方は13世紀の古典的法律家 Bracton の、王は「神と法の下に」(sub Deo et sub lege)立つという考え方によって、より明確な表現をあたえられることになる。

ところで、イギリス民主主義の基本原則とされる「法の支配」(the Rule of Law)は、すべての人が、イギリスの通常法律によって支配され、法の前に平等であるということを根幹とする考え方であるが、いうまでもなく、それは市民革命を通じて獲得されていくのであり、それが確立されたのは名誉革命によってであった。しかし、このような考え方がイギリス民主主義の基本原則として次第に定着して行く素地は、すでに、Norman Conquest 前後のイギリス

の社会につくられていたように思われるのである。(未完)

(注)

- (1) 西暦紀元の始期については、いろいろと問題があるが、本稿の目的にとって必ずしも必要とは思われないので、ここでは特にとりあげない。なお、この点について、G. N. Garmonsway, *The Anglo-Saxon Chronicle*, p. xxvi et seq. 参照。
- (2) 年代順といっても、すべての年を網羅しているわけではない。欠けている年もかなり多い。
- (3) この点について、拙稿「アングロ・サクソン年代記研究(1)」外国文学研究・第3号・68頁参照。なお、Easter Table との関連について、Garmonsway, *op. cit.* p. xx et seq. 参照。
- (4) 注(8) 参照。
- (5) 注(12) 参照。
- (6) 自然現象に関するものをあげればおよそつぎのとおり。664年(日食), 671年(鳥の大量死), 729年(彗星), 733年(日食), 734年(赤みを帯びた月), 795年(日食), 800年(月食), 802年(月食), 806年(月食, 太陽のまわりの不思議な輪, 月の中に十字架が見える), 809年(日食), 827年(月食), 879年(日食), 892年(彗星), 904年(月食), 905年(彗星), 995年(彗星), 1032年(鬼火), 1046年(厳冬), 1049年(地震), 1066年(彗星), 1070年(大飢饉), 1097年(彗星), 1104年(太陽のかさ), 1106年(不思議な星, 二つの月), 1110年(霜害, 変った星), 1114年(変った星), 1118年(強風), 1119年(大地震), 1121年(月食, 強風), 1122年(強風, 大地震, 奇怪な火), 1129年(大地震), 1140年(日食)。これによって、自然現象が、当時の人々にとっていかに重大な事象であったかを知ることができるのであるが、叙述は極めて簡単なので、ここでは列挙するにとどめた。
- (7) 原文は、John Earle & Charles Plummer, *Two of the Saxon Chronicles Parallel* によったが、句読点に、(ˆ)(;) のようなものがあるし、Modern English なら comma とすべきところに period がつかわれていることが多いので、適当に period や comma になおした。また、長母音を示す(—)は、原文にないということもあるが、むしろ印刷の都合で省略した。
- (8) Garmonsway, *op. cit.* p. xvi.
- (9) Plummer, *op. cit.* p. 46 (MS. \bar{A}) et seq. 本稿に引用した原文は、後期の、稿本Eしかないものを除きほとんど全部稿本 \bar{A} による。
- (10) Danes との戦いは、特に Alfred の治世に多く見られるが、*pa Deniscan ahton sige* [885]. (デーン人勝利を得た), *para Deniscra þær wearþ swiþe mycel wæl*

geslegen [894]. (そこで、デーン人に対して大量の殺戮がおこなわれた) のような戦いは、Alfred の治世だけでなく、その後も、続けられた。

(11) 稿拙・前掲(2) 外国文学研究・第6号参照。

(12) Garmonsway, *op. cit.* p. xvi.

(13) *ibid.*